東アジアの発見

―「世界史の成立」と日本人の対応―

荒野泰典

I　はじめに

いわゆる「大航海時代」のなかで、地球的世界に出会った時の日本人の、アイデンティティーの模索の結果が、「東アジア」の発見だったのではないか、という仮設にもとづいて、以下に私見を述べたい。

かつて私は小論「東アジアの華夷秩序と通商関係」[1]を書くなかで、「東アジア」、もしくはそれに近い地域概念は、「十六世紀半ば以降の地球的世界の成立という歴史的事件に媒介されてはじめて成立した」ということに、はじめて気づいた。あらためて言うまでもないことなのだが、「東アジアという地域既念も歴史的に獲得されたもので、人の認識以前から先験的に存在する、単なる地理的なひろがりではなかった」。「地域」も、生まれ、消滅する歴史的存在であり、また、どのような指標を立てるかによって、多様に、また重層的に存在する。「東アジア」も、そのような地域の一つとして、とりわけ、日本人が帰属する場の一つとして、発見されたのだった。

その発見は、偶然になされたのでもなかった。その経緯を大まかに言えば、日本列島が地球的世界にまきこまれて、旧来の価値観とアイデンティティーが解体していくなかで、自らの存在への問い直しが行われ、自らの所属する場として「東アジア」が発見された、ということになろうか。その過程にはかなりダイナミックな思想的営為が想定されうる、と最近私は考えるようになった。

その歴史的背景をなしたのが、十六世紀前半から十七世紀後半にかけての、この地域全体をまきこんだ旧秩序の崩壊と新秩序の形成という大変動だった。この全過程を私は「倭寇的状況」と呼んでいる。[2]「倭寇的状況」は、明の朝貢貿易と海禁政策、および東南アジアから日本列島まで展開

した華人ネットワークという前提条件に、日本と中南米の銀生産の拡大、ヨーロッパ人の登場による地球的世界の形成という新たな要素が加わって発生した。この地域全体の人々（諸民族）の政治的・経済的成長がこの状況の基礎になっているが、それをリードしたのは、国境や民族の枠を超えた人々の連合体である後期倭寇、その大部分を占めていた華人、そこに参加していった日本人やヨーロッパ人などだった。そして、これらの成果を吸収しつつ成長して、この地域に新たな秩序を打ち立てたのが、日本の統一政権や女真族の国家清であり、これらの勢力を軸に国家的ネットワークが再編されて、この地域に平和がもたらされた。その過程で顕著なのは、「中華」なるものの相対化であり、その象徴的な事件が「華夷変態」、すなわち、明清交代（一六四四年）だった。

Ⅱ　広がる世界 ― 地球的世界との出会い ―

一、藤原惺窩の旅 ―「南航日記残簡」[3]から ―

まず「倭寇的状況」のもとでの日本列島の状態がどのようであったか、その一端を、藤原惺窩（一五六一～一六一九）の、一五九六年（慶長元）の、鹿児島地方への旅行を通じて見る。

一五九六年といえば、豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争のさなかで、明の使節が来日している時期に当たる。惺窩はこの年の六月二十八日に京都を出発し、瀬戸内海から豊後水道を経て、七月十三日に、大隅半島の、志布志湾をすこし南に行った所にある内之浦に着いた。彼は内之浦に四日滞在した後に、高須・山川・鹿児島・庄内（現在の都城）などをめぐり、島津義久や、その重臣伊集院忠棟に会った（彼の足跡については、図Ⅰを参照のこと）。

その後惺窩は、山川港から明に向けて出航したが、台風に遇って硫黄島に漂着し、渡明の計画を断念したと言われている。惺窩が義久や忠棟にわざわざ面会したのは、渡明の許可をもらうためだったろう。

この後惺窩は京都に帰り、朝鮮被虜人で、著名な朱子学者でもあった姜沆と出会い、彼との親交によって朱子学への理解を深めた。それが近世日本朱子学の出発点となった、ということはよく知られている。[4] この日記でも、あからさまではないが、簡潔な記述の端々に、惺窩の外の世界への強い憧れが見てとれる。彼に渡明の旅を決意させたのも、この衝動だったろう。この日記からは、彼が、この前年にも肥前の名護屋を訪れたことがわかるのだが、それも今回の旅と無関係ではないように思われる。

しかしここでは、惺窩の思想的展開よりも、彼がこの旅

の途中で、とりわけ、内之浦とその周辺で経験したことに注目したい。まず、惺窩は、内之浦に着いたその日（七月十三日）に、「この浦には時折唐船が来泊する」と書いており、実際に滞在中に、新しく唐船が入港するのを見、その船を訪れて、乗り組みの唐人たちと筆談している（十七日）。この船はルソンからのもので、ルソンから内之浦までは四・五日の行程だという。その他にも彼は明人（中国人）に会って話している。これらのことから、内之浦には唐船がしばしば来泊しており、日常的に中国人に出会い、交流するような状況があったことがわかる。当時内之浦は庄内領で、この港に来航した華人たちが城下（庄内）に集住させられて、現在まで名称の残る唐人町を形成することになる。ちなみに、現在内之浦には唐人町、あるいは唐人小路などの、「唐人」を冠した町名や街路などは残っていないが、それは彼らが都城に移住させられたからだろう。唐人町については、後にもう一度触れる。

次に、惺窩が、鹿児島地方出身ではない日本人に多く遭っていること。例えば、彼が浜市で遭った真言宗の僧巡宗は、琉球に一〇年いて、彼の国の事情に詳しいと言うが、この僧の出身は高野・根来の辺りだった。山川に住む三谷という人物は、生国は京都で、元松永久秀の家臣だったと言う。同地で惺窩は、玄也という泉堺の浄土宗の僧ともすれちがっている。その他説教節、風俗踊りなどの芸能者たちも、日記の端々に見える。これらの人々も、外国人たちとともに、この地の人物模様を多様なものにしていた。

三つめに、惺窩が、海外の珍しい物や情報にふんだんに接触していること。例えば、十三日早朝に内之浦に着き、おそらくそれまでの乗船の船頭と思われる弥二郎の父浄感の家を宿に定めた。浄感の嫡子（弥二郎とはちがう人物か）から昼の接待を受けたが、酒の肴は「異域」のものであり、酒を享ける盃はルソンのガラス製だった。この嫡子は、昨年ルソンに行って、彼の地の風土や人物、珍しい物などを実際に見ていた。「話は弾んで時を忘れ、すこぶる旅心を刺激」されて、惺窩は、「天地は至大、然るにこの国は狭隘、どうして見聞を広めない者が広い知識を得ることができようか、ああ」[5]と嘆息する。

午後四時頃には宗意が夕食を持って宿所を訪れたが、酒は葡萄酒だった。宗意は、琉球に住居があり、妻子を持っているので、その地の事情に詳しく、物語は黄昏まで（つまり、数時間）続いた。十四日には、彦右衛門（宗意が陪侍させた召使の一人か）という人物に、ルソン・琉球間の「旅程」の記録を持って来させて「一覧」しており、翌日には、同じ人物が持って来た「世界図」を見ている。これは、南蛮人（蛮人）の描いたものだろう、と惺窩は推測している。[6]

このような経験を通して惺窩は、世界の広さ、多様さを皮膚感覚で知った。その経験の延長線上に姜沆との出会いがあった、と言ってよい。

二、唐人町の風景 ― 諸民族雑居の世界 ―

惺窩が訪れた内之浦は、外国船が時折来航し、外国人が行き交い、種々の言葉や文物・情報などが行き交う港町だった。外国船の来航が日常化し、外国人、特に華人たちが定住するようになると、そこは、上述のように、唐人町、あるいは、唐人小路、などと呼ばれるようになる。次に見るように、その名を今に残している例もすくなくない。

言うまでもないことだが、唐人町の周辺には日本人の町もあった。平戸のように、ポルトガル人やオランダ人などのヨーロッパ人が来航するようになると、彼らの商館が置かれることもあった。つまり、その場には、複数の民族が、それぞれ集団をなしながら、互いに隣接して、並存していた。そして、そこは、様々な人・物・情報が出入りする場所ともなり、複数の言葉や文化が並存し、交じりあい、反発しあって、独特のエネルギーに満ちた場となった。これが新しい文化を生み出す力の源泉となった。

私はこのような状態を「諸民族雑居の状態」と名づけ、日本列島が「倭寇的状況」に巻きこまれた時に生じた、この時期特有の現象の一つと考えた。しかし、「諸民族雑居の状態」そのものは、同じ時代の、東南アジアの各地にも存在したし、北方地域にも見られた。つまり、諸民族が交じりあう港町や市場町などの、交通や交易の拠点で、権力がその状態を排斥しない場合には、古今東西を問わず、一般に見られる現象だと言ってよい。この「状態」が日本列島の住民たちにとって持った意味はなんだったのだろうか。論証抜きの、まったく私のイメージにすぎないが、それを以下に整理しておこう。

日本列島の場合は、律令国家がカヴァーした領域内においても、支配者の意識は別にして、住民は和人種の他に、中国系、朝鮮系などの多人種で構成されていたにちがいない。現在の日本民族の母体となるような人種と生活文化は、おそらく、それらの多人種・多文化の混合や融合がゆるやかに進行するなかで、徐々に形成されていった。その過程は、刀伊の入寇（一〇一九年）や元寇（一二七四年・八一年）、応永の外寇（一四一九年）などの紛争、外の世界との交渉の緊密化などによって、いくらかの刺激を受け、そのかぎりでは加速されるものの、それが一段落するのは、一五世紀後半、応仁文明の乱の頃ではないか。

その頃までは、被支配者のレヴェルで、国家のちがいや、まして民族の対立などが鋭く意識されることは、あまりなかった。しかし、その様相は、戦国時代を通じて大きく変わる。守護大名の大内氏が、朝鮮側に対して、多々良朝臣

を名乗って、朝鮮半島の出自であることを誇示したことはよく知られているが、大内氏が戦国の争乱で滅びたように、その後はそのような自意識を持つ者が権力の座に坐ることはなくなった。いわゆる「下剋上」という現象は、地下の者たち、つまり、その地方に根ざした者たちのなかからその地方を支配する者が出て来ることだが、その現象は、単なる上下の循環ではなく、すなわち、均質な者たちによる単なる権力闘争ではなく、異質な者を排除する戦いでもあったのではないか。こうして、各地方はそれぞれに特色を持って歴史上に姿をあらわした。東と西に象徴されるような大きな地域差が強調される一方で、本州の最北端から九州の最南端までが、ほぼ一つの民族が暮らしているとの認識が、被支配者層のなかにも生まれた。「下剋上」の時代は、まさに、地方の時代であり、かつ、それが新たな論理（それが何かはまだ明確になってはいなかったが）によってふたたび統合されようとする時代でもあった。

日本六六国二島の住民の、人情・風俗・気質・性格などを具体的に記述した、著者不明の地誌『人国記』が編纂されたのが、一六世紀の中頃（一五〇二から七三年の間）と推定されていることは[7]、とても示唆的だ。この列島の住民たちが、それぞれに人情・風俗・気質・性格などにおいて明確な個性を持つと認識されていること、つまり、それらの地方がそれぞれに特徴（地方色）を持って立ちあらわれてきたのだった。こうして日本列島は、おそらく、様々な個性を持つ住民たちで構成される地方の集合体として認識されることになった。それと同時に、この時期には、この書物の編者の手元にこれだけの情報が集まるような状況が生まれていたということにも注目しなければならない。同じ頃イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエル（一五〇六～五二年、Francisco de Xavier）は、ヤジロウの日本情報から、日本は一つの言語の国との報告を得て、日本に向かった[8]。ザビエルらにこのような情報を提供したのが、倭寇だったとも伝えられるヤジロウだったところが、重要だ。人・モノ・情報の流通の速度が増し、範囲が大きく広がったのが、戦国時代の、もう一つの特徴だった[9]。それがさらに内側からの日本人の形成を加速させることになる。「諸民族雑居の状態」に巻きこまれた頃の日本列島とそこの住民は、そのような状態にあり、巻きこまれたことがさらに、日本人の形成を加速させることになった。

開港地や、いわゆる他国と境を接する辺境地帯ではごく稀に雑居状態が見られたとしても、列島全体がそのような状態に巻きこまれることはなかった。たしかに、中世には、すでに華人の交易ネットワークが列島の南西部にはおよび、いわゆる遣明船も、琉球の中継貿易も、そのネットワークに乗ることで実現されたと言ってよい。鹿児島県下の数箇所や博多などにも、小規模ながら、定住する華人たちがい

た。一六世紀の半ばには、それが一気に増大した。

一六世紀前半に日本の銀生産が増大し、それを求めて、まず、華人たちが、ついで、彼らに誘われてポルトガル人たちが、列島にやって来るようになった。イスパニア人、オランダ人、イギリス人などのヨーロッパ人がそれに続き、やや異色だが、豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に日本に連行された、五万とも六万とも言われる朝鮮被虜人たちもそれに加わる。それとほぼ同じ時期に、日本人も東南アジアの各地に進出し、日本町が形成された。これらの日本町の周辺にも、唐人町や現地の人々の町、ヨーロッパ人の商館などがあった。日本列島内の唐人町と東南アジア各地の日本町とは、一つの状況が生み出した双生児のようなものだった。

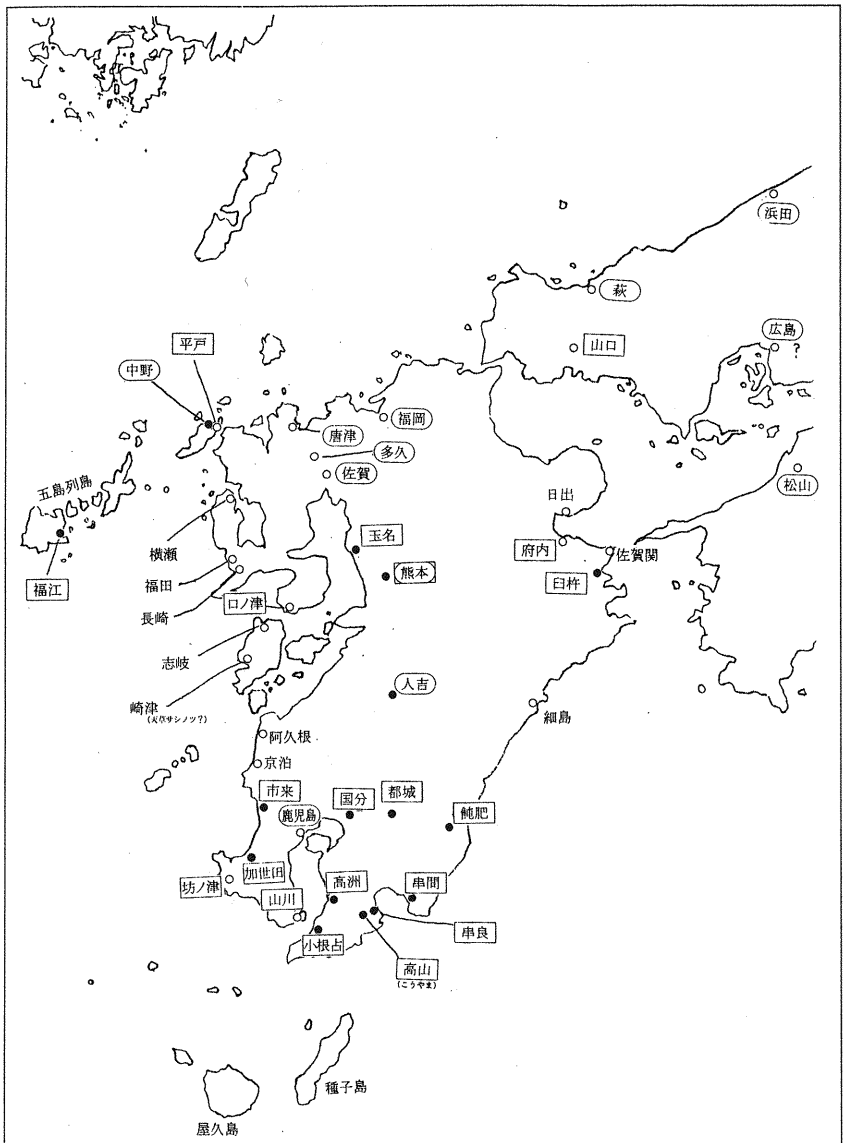
図Ⅰは、現在地名として残っているか、あるいは、史料や文献によって確かめられる、「唐人」の名が冠せられた町や街路と、ポルトガル・イスパニア船の来航地を、九州を中心とした地図において見たものだ。この地図から、以下の三つのことが指摘できる。

一つは、外国船（中国船・ヨーロッパ船）の来航ルートは、九州の西沿岸に沿って北上するルート（甑島・五島・平戸）、天草を経て有明海に入るルート（天草・有明海・八代海）、豊後水道を北上する東沿岸ルート（内之浦・細島・大分）の三つあったと推定できること。西沿岸ルートは、有名な倭寇の頭領王直が、中国沿岸の密貿易の基地を追われ、五島を経て平戸に拠点を置くルートであり、平戸に安住できなかったポルトガル船が良港を求めて長崎を見いだすまでの、遍歴の舞台でもあった。豊後府内（現大分）は、後期倭寇の最盛期の一五五六年に日本事情調査のために来日した鄭舜功が、約半年滞在した場所だ。彼が帰国後有名な日本研究の書「日本一鑑」を著したことはよく知られている。

しかし、彼がなぜ滞在先に豊後府内を選んだかが、私には長い間不思議だった。彼が戦国大名大友宗麟の庇護、協力を受けたことはよく知られている。豊後府内は宗麟の城下町だったから、彼がこの地を拠点としたことには、無理がない。しかし、それだけではなかっただろう。府内や臼杵には、現在でも唐人町の名称が残っており、そのことから、この地が中国との交易の拠点でもあったことが知られる。この要素が、彼が豊後府内に滞在したもう一つの理由だったにちがいない。舜功と宗麟との関係も、府内に拠点を置く華人の仲介によると推定するのが自然だろう。

中央のルートの有明海や不知火海にも、中世以来中国船が来航したことが知られており[10]、島原半島の先の口之津には唐人町があり、その対岸に当たる天草下島の沖あいの通詞島には、五島の福江や平戸にあるのとよく似た六角井戸

図Ⅰ　唐人町とポルトガル船・イスパニア船来航地



［凡例］

○ポルトガル船・イスパニア船来航地

● 地名 中国人系唐人町他「唐人」地名

● (地名) 朝鮮人系唐人町

○ 地名 中国人系唐人町他「唐人」地名でポルトガル船・イスパニア船来航地

が現存している。[11]

二つは、唐人町の所在地とポルトガル船の来航地とは、重なるか、隣りあっていることが多いこと。最初にポルトガル船が平戸に来航するのも王直の誘いによると推定されているように、[12]ポルトガル人も、最初から独自のルートで日本列島にたどり着いたのではなかった。彼らは、日本についてはいわば先達である華人、つまり、倭寇に先導される形で、この列島の西南部に到達したのだった。それが、豊後地域に早くからポルトガル船が来航し、キリスト教が根づいた理由でもあった。

三つは、現存する唐人町に華人系のものと朝鮮人系のものと、二種類あること。華人系の唐人町は、日本に渡来した華人たちによって形成されたものだが、朝鮮人系のそれは、豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争の際に、日本軍によって掠奪・連行された人々によって形成された。彼らは被虜朝鮮人と呼ばれるが、[13]そのうちよく知られているのが陶工たちで、この人たちによって朝鮮の発達した磁器生産技術が日本に移植されたのだった。現在、磁器の生産で有名な窯場である、伊万里（佐賀）、波佐見（長崎）、苗代川（鹿児島）、萩（山口）などは、いずれも彼らが始祖になっている。

ビジネスチャンスを求めて自ら日本に渡航してきた華人たちと、かならずしも望まない形で、むしろ、掠奪され、売買されて日本にやって来たケースが圧倒的に多い朝鮮人たちと、両者は、立場も境遇も対照的だが、ともに「倭寇的状況」のなかで日本列島にやって来たという点では構造的な連関を持ち、かつ、近世社会の形成に大きな影響を与えたという点でも共通している。

こうして、唐人町は、倭寇やヨーロッパ人によって構成されるシナ海域の経済的・人的ネットワークと、列島内部の政治的・経済的なネットワークとの結節点となった。ここは単にものの集散地であっただけではない。様々な人々がここで出会い、文化や思想、宗教、情報などが伝えられ、交換され、そのことによって、この地域は新たな情報の発信地ともなった。

さて、ここであらためて惺窩が歩いたルートを想いおこして見よう。彼が歩いたのは、唐人町の分布の密度が特に濃い地域だったことがわかるだろう。つまり、彼は、私の言う「諸民族雑居の状態」のなかを旅行したのだった。彼の日記は、はからずも、その状態の現場からの報告になっている。彼は、そこで見るもの聞くものすべてに刺激を受け、そこでの出会いの数々によって広大な世界に目を開いて行ったのだった。広い世界、つまり、地球的世界の発見が朱子学への確信につながったのではないか、と私は推測している。

Ⅲ　三国世界から五大州へ

― 伝統的世界観の解体と東アジアの発見 ―

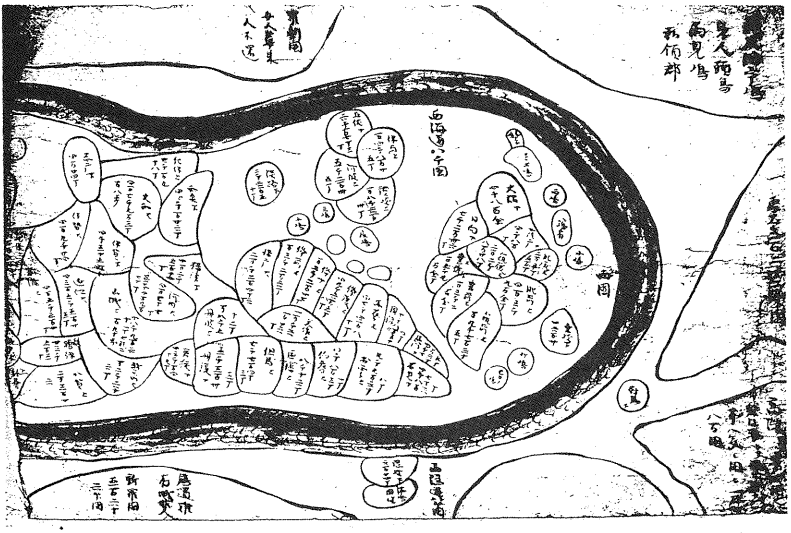
一、伝統的世界観の四類型

惺窩のような経験を世界観が転回する契機ととらえ、それを「世界図」の変化、つまり、新しい世界観の衝撃による伝統的世界観の解体・変容の過程に置きなおしてみよう。

当時の日本には、伝統的な世界観が、すくなくとも四種類あったと考えられる。

一つは、もっともプリミティヴなもので、日本中心の世界観を表現したものだ。日本人の世界観の基層に常にあるもので、おそらくは、他の国、例えば、朝鮮などにも共通する自己中心的な、あるいは、自己を中心にした世界観だと言ってよい。あるいは、エスノセントリズムにも通じて、すべての民族が自己を中心にこのような「世界」を描くのではなかろうか。行基図風の日本列島を蛇か竜らしいものがとり巻き、その外側に、「琉球」・「高麗」などの実在した国の他に、「雁の道」や「羅刹国」などの想像上の国が配されている。この類型の、現存する最も古いものは、一四世紀中頃と推定されている金沢文庫の「日本図」（図Ⅱ）だ。[13]

この種の世界観は、より高度な世界観の登場によって打撃を受けるが、それによってすぐに消え去るのではない。



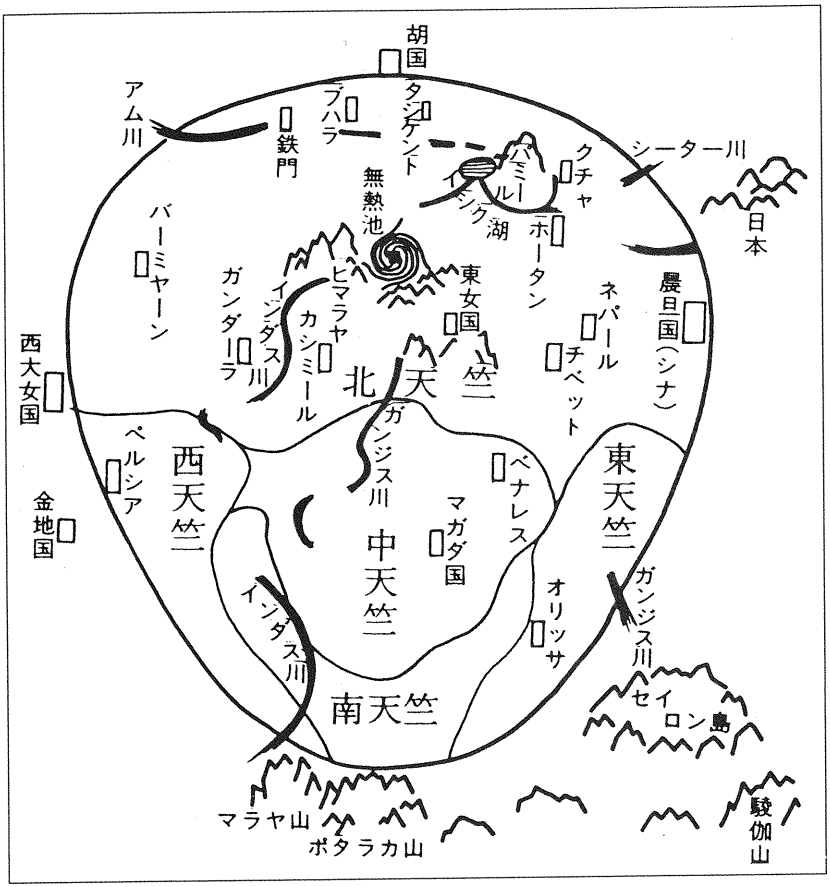
図Ⅱ　金沢文庫日本図（遠江・越後以東欠）

日本人の意識の深層に沈潜し、その基層に組み込まれながら、生きつづける。それが形に表れたのが、鯰絵などだと私は考えている。

二つは、中国を中心とした世界図。中国では、古くから世界図が作られていたが、現存するもので最も古いのは一一三七年の「華夷図」で、漢代に賈耽によって作成された「海内華夷図」（八〇一）の系統をひくものと推定されている。[15] これは、中国大陸を中心に、右上方には朝鮮半島、右側にはシナ海を、左側に西域を描いている。この系統の地図も、当時の日中交流のなかで日本に将来されたと思われる。例えば、京都東福寺栗棘庵の「宋拓輿地図」は、同庵の開基で入宋僧の白雲慧暁（一二二八～九七年）が、一二七九年に宋から帰国する際に将来したものと言われている。これによって当時の日本の知識人は、中国を中心とした世界の様相を知ることができた。しかし、その地図のなかでの日本は、中国大陸の東海上に、まったくないか、たとえあっても、まことにささやかな、芥子粒ほどの存在として描かれているにすぎなかった。この地図を見た日本人が、その中華的世界観のなかのどこに自らが位置づけられるのかについて疑問を抱いたとしても、不思議ではないだろう。その疑問が、次に見る三国世界観を生み出すことになる。

三つめは、いわゆる三国世界観で、仏教的な「五天竺図」、あるいは「南瞻部州図」がそれに当たる。図Ⅲがそれだ。[16]「五天竺」とは、東・西・南・北・中の「天竺」、すなわち、天竺のすべて、という意味で、いわゆるインド的世界の総称として、古来用いられてきた。[17]「瞻部州」（閻浮提とも言う）とは、仏教的世界観の須弥山説に出てくる東・西・南・北の四大陸のことで、南の大陸のみに人間が住むとされていることから、人間世界は「南瞻部州」と考えられた。それに、仏典を求めて天竺へ旅した玄奘三蔵の旅行記「大唐西域記」（六四六年）の地名を中心に、当時すでに知られていた、ペルシャ・中央アジア諸国・シナ・日本なども加えて、「世界図」としたものだ。法隆寺所蔵の「重懐書写五天竺図」（一三六四年）が日本最古のものだから、遅くともそれ以前には日本に将来されていたことになる。

しかし、中華的世界観と同様に、仏教的世界観においても、日本は無視されるか、微小な存在でしかなかった。それを、須弥山説を都合よく解釈して、日本を南瞻部州に附属する二つの中洲のうちの一つに当てて、海中の小国ではあるけれども、天竺・晨旦（中国）にまさるとも劣らない価値を持つ国であるとした。こうして、五天竺図に日本を描きこんで成立したのが、日本版五天竺図だった。[18] 北畠親房『神皇正統記』（一三三九年）の冒頭の部分は、その解説書としても読むことができる。五天竺図において、広大な天竺



図Ⅲ　「五天竺図」の説明図

「五天竺」とは東・西・南・北・中のインドすべてという意味で、インド全域を指す呼称として古くから用いられた。確かにこの大陸（瞻部洲）の大部分を占めてはいるが、ペルシア、中央アジア諸国、シナ、日本もあり、内容的には当時の既知世界を包含している。インドの広大なのに比して晨旦（梵語チーナスターナの音訳）国が小さいのは、玄奘の旅の起終点としての役割に過ぎなかったからである。説明図における地名等の表記は、一部を除き現代風に改めてある。以上の解説と説明図は、いずれも『日本古地図大成　世界図編』「解説」による。

に較べて晨旦が小さく描かれているのは、玄奘の旅の起着点としての役割が与えられていたにすぎなかったからだ。しかし、親房はそのことに着目し、「震旦ヒロシト云ヘドモ五天ニナラブレバ一辺ノ小国ナリ」として、中国の地位を相対化する。さらに、天竺・震旦に較べ日本は、「別州ニシテ神明ノ皇統」を伝えた国である、とする。こうして、東海上の一小国は、天竺・震旦と並び立ち、しかも、それらの国よりも優れた美質を持つ国として、もちあげられることになった。上記の疑問に対して日本知識人たちが編みだした解答の一つがこれである。

四つ目は、朝鮮系の世界図で、原図は、図の下部にある題跋から、朝鮮の高級官僚で文人の権近（一三五一～一四〇九年）によって一四〇二年に作成されたものであることがわかっている。中国・朝鮮を中心に、相当変形されているとはいえ、中央アジア・アフリカからヨーロッパまでを描きこみ、一五世紀はじめの段階における既知の世界をほとんどカヴァーしている。大航海時代以前では最も高いレヴェルの世界図の一つと言ってよい。

権近の題跋によれば、この図は、中国から入手した、中国本土とアラビア系の地理情報を含む二つの中国系の地図と、朝鮮、および日本・琉球の地理情報を集大成して、作成された。当時の朝鮮政府は、倭寇対策の一環として、日本・琉球の地理情報を積極的に収集しており、著名な『海東諸国記』（申叔舟、一四七一年）がその成果の一つであることは、よく知られている。

この系統の地図は、現在韓国では発見されておらず、日本でのみ五点ほど所在が確認されている。そのうち、最も原図に近いと思われるものが、「混一疆理歴代国郡之図」（龍谷大学、一四七二年）だ。この図では、海水が緑に淡水が紺色に塗られていて、それはアラビア系の地図の特徴だと言われている。このこと自体が、当時の朝鮮王朝に、東アジアに集まる世界情報が集積されていたことを思わせる。朝鮮王朝はまさに一五世紀東アジアの「地図編集センター」（応地利明）だった。

残念なのは、この図の成立の経緯以外に、日本に将来された経緯や受容者が明らかでなく、その歴史的影響などがよくわからないことだ。しかし、とりあえず、中世の東アジア域内での人・モノ・情報の交流が、三国世界観を超えて、これだけの世界図を生みだすまでの段階に達していたことの示唆するものは大きいと私は考えている。

二、東西地理認識の交流

いわゆる「世界史」で言えば「大航海時代」、東アジア地域の視点に立てば「倭寇的状況」のなかで、日本列島の住

人たちも地球的規模の地理認識に接することになる。そのような機会は、信長、秀吉、家康などの支配者層のみでなく、望めば、惺窩のような一知識人にも開かれるようになったことが、この時期の特徴の一つと言えるだろう。そのような状況のなかで、先にあげたような伝統的な世界観が解体し、あるいは、変容していくことになる。

しかし、その過程は、かならずしも、ヨーロッパ的な地理認識がそのまま日本社会に受容されて、伝統的な世界観が解体や変容を迫られるというような、一方的なものにはならなかった。この地域に到達した時のヨーロッパ人たちの、この地域に関する地理認識は、言うまでもなく、不十分なものだった。その不十分さを補ったのが、当時の東アジアに蓄積されていた、当該地域に関する地理認識だった。それは、日本人の世界認識に大きな影響を与えたとされるマテオ・リッチの「坤輿万国全図」(一六〇二年)の成立の経緯を見ても明らかだ。[19]

リッチの地図と、彼が参考にした同時代のヨーロッパ人の手になる世界図とを比較した場合に見てとれる明らかなちがいの一つは、中国や朝鮮・日本・琉球などの、東アジアの諸国についての描写が、はるかに実態に近いことだ。「坤輿万国全図」の製図法や図形、あるいは国俗注記のアジアを除く部分は、オルテリウス(Abraham Ortetrius、一五二七〜九七)やメルカトル(Gerardus Mercator、一五一二〜九四)、プランシウス(Peter Plancius、一五五五〜一六二二)を参考にしたもので、特定のヨーロッパ製の地図をそのまま翻訳したものではない。特にアジア地域の部分は、リッチ自身の見聞や、中国人によって提供された中国側の資料、それに彼のキリスト教布教の立場などにもとづいて、書きなおされ、あるいは新たにつけ加えられるなどして、完成された。日本に関する情報は、ほとんど、鄭若曾(?〜?)編の『籌海図編』(一五六二年)によっている、と言われる。このように、ヨーロッパ人の世界認識や地図作成などの技術と東アジアの地理認識が交流することによって、全体としてみれば、ヨーロッパ製の世界図よりも正確な地図が作成されたのだった。

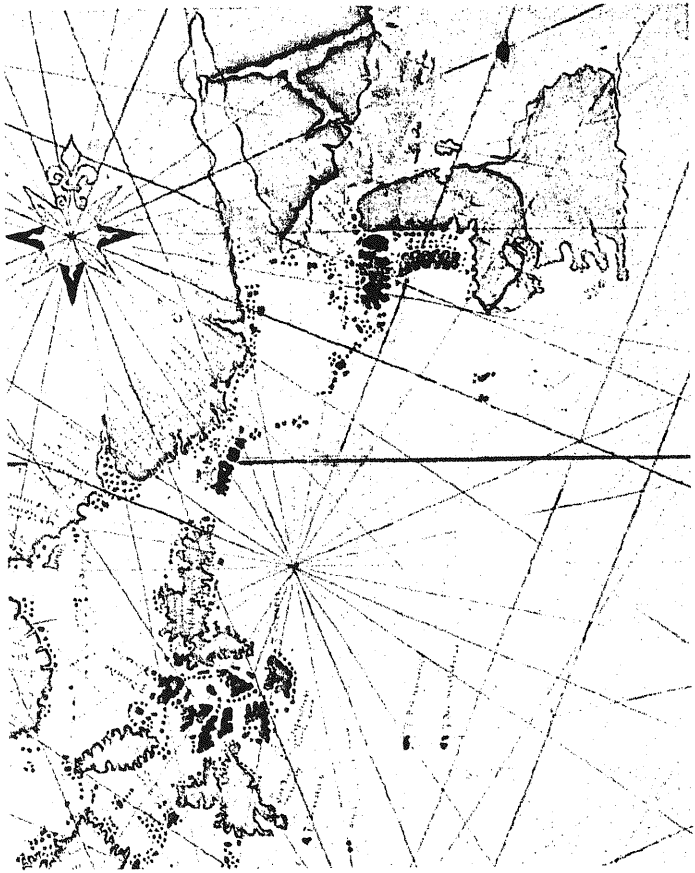
現在二〇点ほどの現存が確認されている、いわゆる「南蛮世界図屏風」についても、東アジアの部分に関しては、同じことが言える。この系統の世界図も、制作年代について見ると、早いものと遅いものではかなり開きがある。そのうちの早いものは、リッチの地図よりすこし早い時期に作成されたと考えられているが、なかには一七世紀の中頃まで下ると見なされているものもある。また、東アジア地域の位置が、まさに極東、つまり、画面の左端にあるものと、画面の中央に置かれているものなど個体差も大きい。[20]

しかし、それらのいずれも、日本とその周辺の地域だけは、ヨーロッパの原図によらずに、当時の日本人の知識で描き改められている、という点では共通している。[21]

ヨーロッパ人の地理認識も彼らの東アジアへの来航によって、変化をせざるをえなかった。というより、彼らが東アジアに来航し、実際に現地を見、また、東アジアで作成された地図やそのもとになった地理的な知識に接することによってはじめて、より正確な認識に達することができた。そのような変化の実例を、東京国立博物館所蔵の「南洋鍼路図」（一五九八年）と「西洋鍼路図」（一六〇〇年頃）によって実際に見ることができる。[22]これら二つの航海図は、一六〇〇年に豊後の海岸に漂着したオランダ船リーフデ号にあった海図だと言われている。「南洋鍼路図」は東南アジアを中心にした一枚で、「西洋鍼路図」（図Ⅳ）はそれぞれ大西洋とインド洋を中心にした二枚から成っているが、ここでは日本・朝鮮など東アジアの部分を参考に取りあげた。二つの図とも、いわゆるポルトラノ型海図だが、「南洋鍼路図」は、オランダ人コルネリス・ドウツゾーンによって一五九八年に描かれたことが判っている。それに対して「西洋鍼路図」は、年代は正確にはわからないものの、「南洋鍼路図」と図形も類似しているので、ほぼ同じ頃の成立と考えられている。また、地名等も多数の記載があるが、ラテン語の注記ともどもすべて欧文で、日本の文字はまったくなく、日本人が航海に使用した形跡はない。なお、ウイリアム・アダムスが初めて徳川家康に会ったときに見せた「世界の海図」は、これだと推測されている。

「南洋鍼路図」の日本の本州は、海鼠（なまこ）のような形をしたドゥラード型[23]であり、朝鮮半島は、深い入り江によって中国大陸と隔てられてはいるものの、大陸の一部として描かれており、半島としては認識されていない。それに対して、「西洋鍼路図」には、もともとの海鼠のような本州に、関東や東北地方の東半分が描き足され、朝鮮についても何らかの訂正をしようとした跡が認められる。この加筆の跡は、先行研究では、ヨーロッパの航海者自身によるものと推定されている。このようにして、東アジアの地理認識によって訂正されて、同じポルトラノ型でも、より正確な航海図、たとえば、同じく東京国立博物館所蔵の「東洋諸国航海図」のようなものがつくられるようになった。「東洋諸国航海図」は、朝鮮半島や本州がほぼ正確なばかりか、蝦夷島の内之浦湾まで識別できるのだ。

日本においても、中世の、いわゆる行基図から、近世初頭の国絵図・日本総図の作成を経て、徐々に正確なものが作成されるようになった。それらが、それぞれの段階でヨーロッパにもたらされ、彼らの知見が加えられて日本図が作



図Ⅳ　西洋鍼路図（部分）

られ、刊行された。

しかし、まだ、情報の伝達にはある程度の時差と偏差があったことは認めざるをえない。例えば、先に見た航海図では早い段階で朝鮮半島は半島として認識されている。しかし、ヨーロッパで描かれる世界図には、その知識はなかなか反映されず、オランダ人のブラウ（Johannes Blaeu、一五九六～一六七三）の世界図（一六三五年）でもまだ島として描かれている。朝鮮半島が半島としてヨーロッパに紹介されるのは、イエズス会士マルティニ（Martino Martini、一六一四～六一）の中国図（一六五五年）を待たなければならない。このような時差と偏差が解消されるのは近代を待たなければならないが、たとえゆるやかではあっても、東と西の地理認識の交流が進行していたことは否定のしようがない。

いくつかの地理認識を組みあわせて一つの世界図を作るという作業は、東

アジアでも経験ずみであり、これが初めてというわけではなかった。朝鮮製の「混一彊理歴代国郡之図」も、そのように して作成されたことは、先に見た通りだ。このような形で双方の地理認識が交換され、より正確な東アジアの地図や日本列島の地図が描かれるようになるという状況は、これからしばらく続く。

この時期からほぼ二世紀後に、高橋景保（一七八五～一八二九）によって作成された「新訂万国全図」（一八一七年）も、その時期までのオランダ製の世界図に、日本の北方探検の成果を組みあわせて完成されたものだ。その結果、特に日本列島とその北方地域に関して当時としては第一級の情報がこめられているという意味で、世界でも類を見ないほど正確な世界地図ができあがったのだった。もっとも、実測にもとづいたより正確な地図は、伊能忠敬（一七四五～一八一八）の蝦夷地から九州にいたる測量と地図作成の事業（一八〇〇～二一年）を待たなければならない。その伊能図と、最上徳内（一七五四～一八三六）・間宮林蔵（一七八〇～一八四四）のカラフト図を合わせて、日本と蝦夷地・千島・樺太を含めた日本周辺の正確な地図を作り、ヨーロッパで公刊した（一八四〇・四一年）のが、シーボルト（Franz von Siebold、一七九六～一八六六）だった。[24] その陰に、いわゆるシーボルト事件（一八二八年）という大きな犠牲があったことも、あわせて記憶しておこう。

このような交流のなかでもっとも深刻な葛藤を経験し、変容し、あるいは解体していったのが、伝統的な地理認識とそれにもとづく世界観だった。

三、伝統的世界観の変容

近世の日本で作成された世界図には、大きく分けて三つの系統があった。[25] 一つは、戦国末から近世の初期にかけて舶載されたヨーロッパ製の地図をもとに、東アジアの部分を修正しながら作成された南蛮系の世界図（南蛮屏風世界図）。作成された時期は、一六世紀末から一七世紀半ばで、初期のものには輸出用に作成されたものもあった。二つは、中国布教に携わったイエズス会士マテオ・リッチの漢字表記世界図を源流とするリッチ系。おもに刊行された時期は、一八世紀の初めから終わりにかけてで、なかでも長久保赤水の「地球万国山海輿地全図説」（一七八八年頃）は、版を替えながら幕末まで刊行された。三つは、蘭学勃興後のオランダ版地図の翻訳に端を発する蘭学系。司馬江漢（一七三八～一八一八）の「地球全図」（一七九二年）が刊行された最初のもので、銅版画の地図としても日本初だった。先に触れた高橋景保の「新訂万国全図」は幕府撰として公刊された最初のものということになる。この他にも、ポルト

ラノ型の世界図（航海図）があったが、日本人の東南アジア方面への渡航が禁止されたために実用性を失い、やがて忘れられていったことは、先述の通りだ。

このように整理してみると、南蛮系とリッチ系の間に、約半世紀の空白があることに気がつく。この間はヨーロッパ系の世界図は作成・刊行されなかったのだろうか。そうではなくて、この時期には、南蛮系とリッチ系との混合型とも言うべき「万国総図」が刊行され、流布した。[26]「万国総図」というのは、四〇組の男女のペアで表現された世界の民族図譜と対になった大型の木版世界図だ。この図は正保二年（一六四五）に長崎で刊行された。刊行したのは、長崎の優れた測量家であり、洋式航海術の大家でもあったらしい小林（樋口）謙貞（一六〇一～八三）と推定されている。しかし、刊行の翌年謙貞は、彼の天文学・地理学の師である、長崎在住の林吉右衛門（？～一六四六）が処刑されたことに連座して投獄され、以後二一年間獄中生活をおくることになった。この間に、上方の出版業者によって模倣版が作られ、さらに模倣版が模倣版を生むなどして、一八世紀初頭まで版を重ねた。一七世紀の終わり頃からは節用集の挿絵などで広く流布した。[27]

このようにしてヨーロッパ系の世界地理認識が、近世を通じて、時期と位相を異にしながらも、日本社会に浸透していった。いわゆる地球球体説も、儒者林羅山（一五八三～一六五七）は強く反発したのに対し、暦学・天文学者で幕府の初代天文方渋川春海（一六三九～一七一五）は、地球説にもとづいて貞享暦（一六八四年）をつくった。春海は、リッチ系の世界図の日本での模写図と南蛮世界図屏風にもとづいて、六曲一双の「世界図」・「天文図」を作ってもいる（一六九八年頃）。地動説も、それよりやや遅れるが、オランダ通詞本木良永（一七三五～九四）訳の『天地二球用法』（一七七四年）[28]によって日本に紹介されて以後、蘭書の翻訳などによって、地動説を説く者が多くなった。

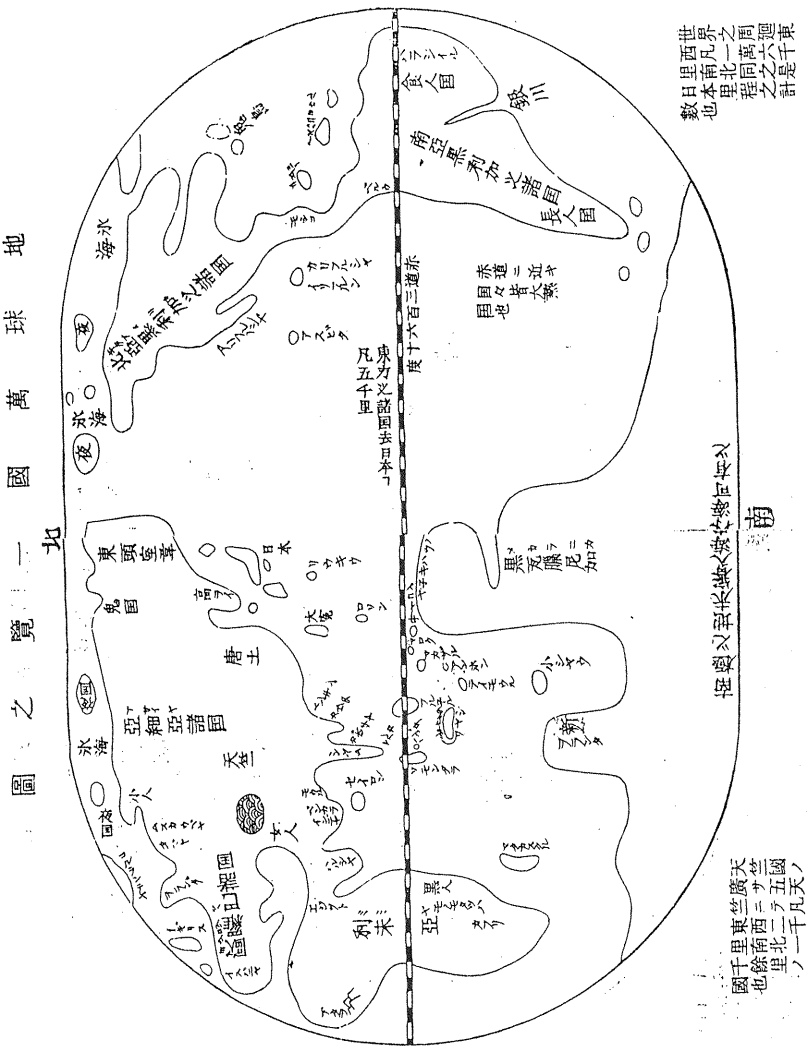
このように、おもに、天文学や地理学、医術などの実学のレヴェルで、ヨーロッパ系の学問や技術の優位性が認められるようになっていったが、その転回点はおよそ一八世紀のはじめ頃にあるように見える。新井白石（一六五七～一七二五）がイタリア人宣教師ジョヴァンニ・シドッチ Giovanni Battista Sidotti（一六六八～一七一四）を尋問して、有名な「天文地理の事に至ては、企及ぶとも覚えず」（『西洋紀聞』上巻）という感想を書きつけるのが、一七一五年。同じ頃寺島良庵（？～？）は『和漢三才図会』（一七一三年）で、仏教的世界観について、次のように述べている。[29]

仏教でいわゆる三千世界とは寓言（たとえごと）であって、はっきりしたことはよくわからない。天文学者連中が用いる地理万国の図は大変詳細で、邦国（くにぐに）も大変に多くある。けれどもそこに描かれているのは六大州のみである。

「六大州」というのは、ヨーロッパ・リミア（アフリカ）・アジア（亜細亜と書き、アサイアとルビを振っている）、北アメリカ・南アメリカ、メガラニカ（南にひろがる広大な未知の大陸）で、アメリカ大陸を一つに数えたり、あるいは、メガラニカを勘定に入れなかったりして、「五大州」になることもある。ここでは、参考のために、西川如見『増補華夷通商考』所載の「地球万国一覧之図」を掲げた（図V）。いずれにしろ、ここでは「六大州」（あるいは「五大州」）という地球的広がりが現実のものと意識されて、仏教的世界は「寓言（たとえごと）」、つまり、比喩の類で現実的ではない、あるいは、現実を直接反映してはいないとされている。つまり、現実の世界は、かつての仏教的世界観、例えば、本朝・震旦（唐）・天竺という範疇ではとらえきれない広がりとして認識されている。[30] その広がりのなかで、かつての三国世界観は解体しないまでも、すくなくとも、変容はせざるをえないだろう。

このような動向に対して伝統的な地理認識、例えば、「寓言」と断定された仏教的世界観はどのように対応したのだろうか。かつて羅山が、地球説に対してそうしたように、おそらく、強い反発があっただろう。次に、認識の枠組みはできるだけそのままに残しながら、その限りで、新しい知識を導入しつつ、現実に近づけていこうと努力することになったと推定される。その方法は、おおまかに分けて三つあった。一つは、例えば、団扇型の南瞻部州図の、形はできるだけ維持しながら、そこに書きこむ国名などの情報をできるだけ現実のものに変えて、客観的な正確さに近づけていく。すでに中国では『法界安立図』（一六〇七年）所収の南瞻部州図や『図書編』（一六一三年）所載の四海華夷総図などにそのような特徴が現れている。前者は一六五四年に日本で翻刻されており、一七九四年になって刊行された沙門定恵海（？～？）の『仏法簡要録』所載の南瞻部州図はそれにもとづいて描かれている。『仏法簡要録』は一八四一年にも復刻されており、「なおも仏教的世界像を支持する層があったことを示している。[31]」

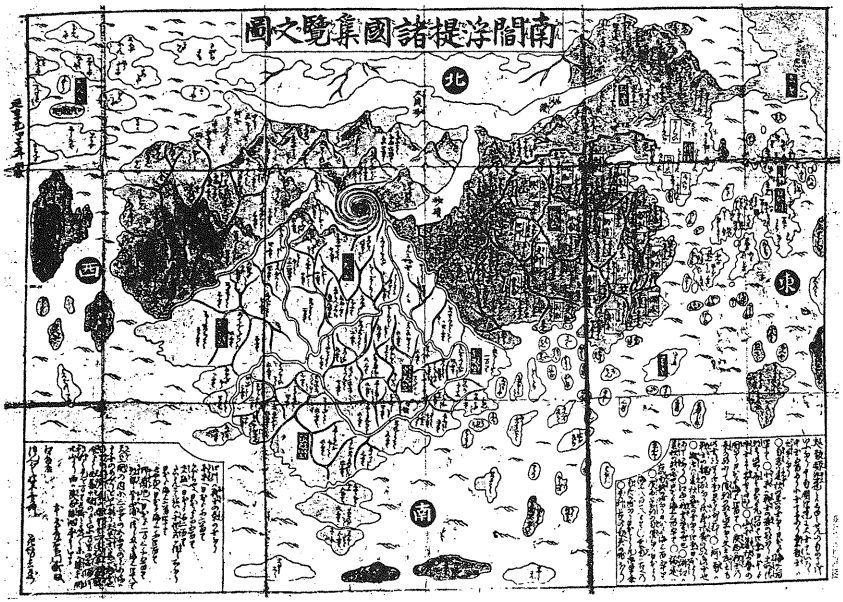
この系統の世界図は、日本でも、一七世紀の末から描かれるようになる。一七世紀末から一八世紀のはじめにかけて僧宗覚（？～？）によって描かれたと推定されている室賀信夫氏所蔵の「南瞻部州図」や南部松太郎氏所蔵の「南瞻部州図」がそれで、団扇型の輪郭を残しながら、前者で


地球萬國一覽之圖
北
南
海氷
氷海
夜
昼
東頭空事
唐土
日本
天竺
亞細亞諸国
亞米利加
亞米利加諸国
亞米利加諸国
亞米利加諸国

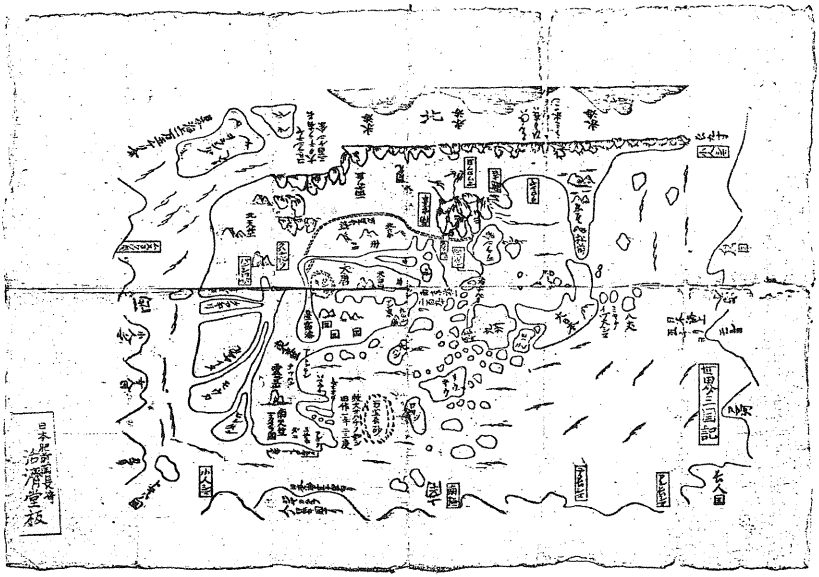
は、朝鮮半島・日本・インドシナ諸国を、後者では、さらにヨーロッパ諸国や西川如見（一六四八～一七二四）の『増補海通商考』（一七〇八年）にもとづく諸国なども書きこまれている。つまり、「既知世界の網羅」への強い意志をうかがわせる。[32] また、後者は、その精粗に大きなちがいがありながらも、明らかに前述の『図書編』所載の四海華夷総図を継承したものだという。仏教的世界図が直面した問題は、日本のみではなく、中国においても共通していたということ、日本における仏教的世界図の変容は中国における同様の試みを踏まえてなされた、ということを示している。京都に華厳寺を開創した学僧鳳潭（一六五四～一七二八）は、南波「南瞻部州図」を踏襲しつつ、それに訂正を加えて、「南瞻部州万国掌菓之図」を作成して刊行した。この鳳潭の図の通俗版は、一方では次に述べる類型に継承されながら、その形のままでも幕末まで刊行され続ける。

もう一つは、五大州のなかに、三国観を、つまり本朝・唐・天竺をそのまま嵌めこむ方法。全体を見ると、たしかにリッチ系や南蛮系の世界図なのに、アジア、特に東アジアの部分を見ると、そこには紛れもなく、旧来の三国が描きこまれている、あるいは、三国観のなごりが明らかに見てとれる。花坊兵蔵（？～？）作と推定されている「万国図」（一七四四年）は、西洋系世界図のユーラシア部分を、同じ作者によって同年に、同じ版元から刊行された「南閻浮提諸国集覧之図」（図Ⅵ）で埋めている。後者は前述の「南瞻部州万国掌菓之図」を簡略化して刊行したもので、その模倣版は幕末まで刊行されている。しかし、摸倣版になると「南閻浮提」（南瞻部州と同じ意味）という仏教的な呼称を除くか、別の題名にしていることもまた、見落とすことはできない。兵蔵が「万国図」のユーラシア部分にこの図を採用した理由について、この地域に関するかぎり、西洋系世界図より仏教系のそれのほうが、作者にとって信頼のおけるものだったのだろう、というこの図の解説者の評価は印象的だ。[33] おそらく、仏教的世界観になれてきた人々にとって、ほとんど実在と信じられていた国や山・川などが描きこまれているということも、また、その図のリアリティを高めるうえで必要だったのだと考えられる。

三国観にもとづいて、五大州を大きく変形させたものも、この類型の変種と言える。「世界三国記」（江戸後期、長崎活済堂刊、図Ⅶ）や「万国一覧図」（古屋野意春、一八〇九年）、「朝異一覧」（清台園、一八三五）などがそれで、書きこまれている地理情報は、明らかに、ヨーロッパ系の知識によるところが多いにもかかわらず、全体は三国観によって構成されている。この類型も、先に述べた「南閻浮提諸国集覧之図」などとともに、幕末にいたっても刊行されている。



図Ⅵ　南閻浮提諸国集覧之図



図Ⅶ　「地球三国記」

これによって三国観の根強さを知ることができよう。

三つめの類型は、現実の世界図と伝統的な、つまり、仏教的な世界観とを切り離したもの。浄土宗の学僧存統（ぞんとう）（?～?）の「閻浮提図附日宮図」は、その代表的なものだろう。ここで存統は、閻浮提を仏教的世界観にもとづいて精細に描きながら、一方の現実世界に関しては、高橋景保の「新訂万国全図」（一八一七年）を図形・地名ともに借用している。刊行年を一八〇八年としているのは、摸倣の事実を隠すためだったと推定されている。存統の師円通（一七五四～一八三四）は、いわゆる梵暦運動の中心人物で、仏教系の須弥山宇宙論にもとづいて、ヨーロッパ伝来の地動説に対抗しようとしたことで知られている。しかし存統は、師の遺志を継ぎながら、師とはすこし異なる方向を採ったように見える。すなわち、現実世界と世界観とを一応切り離して、現実世界では大幅に譲歩しながら、形而上的な世界観については、伝統的なそれを守ろうとしたのだった。現実世界の地理においては、彼自身が西洋系の地形図を借用したことではからずも認めているように、その優位さは覆うべくもなかった。しかし、世界観は、直接目で見て確認することができないだけに、現実世界と切り離してしまえば、さほど傷つかずに守ることができるという面がないわけではない。ここに、先に新井白石がシドッティを尋問して得た感想のもう一つの面が関わる。よく知られているように、ヨーロッパの天文・地理などの学の優秀さを認めた後の彼の言葉は、次のように続く（『西洋紀聞』上巻）。

> 其教法を説くに至ては、一言の道に近き所もあらず、智愚たちまちに地を易えて、二人の言を聞くに似たり。こゝに知りぬ、彼方の学のごときは、たゞ其形と器に精しき事を、所謂形而下なるものゝみを知りて、形而上なるものは、いまだあずかり聞かず。

つまり、白石の場合は、現実、すなわち形而下の世界でのヨーロッパの一定の優位さを認めながら、宗教や思想・道徳などの精神的、すなわち形而上の世界での儒学の優位さを確認する、という構造になっている。白石の場合は儒学だったが、それは仏教徒の場合は仏教的な世界観に、国学者などにおいては日本的な価値に、容易にとって変わりえた。現代まで尾を引いている、いわゆる「和魂洋才」の精神構造は、このような経緯で孕まれていったのだが、そのような精神構造は日本特有というよりも、中国・朝鮮・ベトナム・琉球などの東アジア諸国に共通して見られるのではなかろうか。

以上見てきたように、ヨーロッパ的な地理認識の浸透と

ともに、伝統的な地理認識やそれにもとづく世界観は深刻な葛藤を経験し、それを通して、解体し、あるいは変容していった。しかし、その苦闘の跡をたどることは、伝統的な世界観や価値観の根強さ、したたかさを確認する作業でもあったように、私には思える。それはとりもなおさず、世界図という局面にかぎってみても、東アジアのなかで日本人が長い時間をかけて培ってきた伝統的な世界観を持っており、それは一朝一夕で壊れるような脆弱なものではなかったからだ。日本人が、自分たちの手持ちの材料を、ヨーロッパ的な地理認識のなかに置き換えて、あらためて自分たちのよってたつところを確認した結果の一つが、「和魂洋才」につながる二元論であり、もう一つが、東アジアという地域だった。

四、東アジアの発見

かつて私は西川如見の『増補華夷通商考』について、いくつかの観点から検討したことがある。[34] そのなかで、如見が、世界の国と人物について示した、中華・外国・外夷という三つの類型が、本稿に直接関わる。中華については特にコメントする必要はないだろう。「外国」としてあげられている国々は、朝鮮・琉球・大冤（台湾）・東京・交趾で、東京と交趾は現在のベトナムに当たる。この「外国」に、「中華」と日本を加えれば、現在の私たちが考える東アジアとほぼ重なることになる。寺島良庵の『和漢三才図会』も同様の分類をしているが、これは如見の著書の影響と考えてよい。「外夷」はそれ以外の国々だ。

次に、如見が「外国」の特徴としてあげているのが、「唐土ノ外ナリト云トモ、中華ノ命ニ従ヒ、中華ノ字ヲ用、三教通達ノ国也」ということだった。「三教」とは、儒・仏・道だ。「中華ノ命ニ従ヒ」とは、中国と朝貢関係を結んでいる、つまり、冊封体制下にあるということであり、「中華ノ字ヲ用」るとは、漢字文化圏であるということだ。中国王朝の冊封体制から離脱したこと、また、それを可能にする諸条件を日本が獲得したことが、近世日本の国際関係の特徴の一つだ。しかし、足利義満以来「日本国王」が明皇帝の冊封下にあったことは確かだし、近世日本が、他の「外国」と同様に、中国と密接な関係を保っていたことも、否定できない。ともあれ、これらの特徴は、かつて西嶋定生氏が、「東アジア世界」を構成する要素としてあげた、冊封関係、漢字文化、儒教、律令制、仏教と、ほぼ重なっている。[35]

「律令制」は如見の時代には知られていなかった。また、道教は、西嶋氏はあげていないが、如見の言うように、この地域に共通する要素の一つに加えていいだろう。しかし、このような些細な異同を別にすれば、如見と西嶋氏の見解

は非常によく似ているということに気づいた時に、私は新鮮な驚きを感じた。西嶋氏の提言が、日本の歴史が展開した舞台である東アジアという地域に共通する要素は何かという真剣な問いかけの結果であることは、あらためて言うまでもない。如見の場合にも、それに等しいほどの思想的営為があったと想定してさしつかえない。つまり、地球規模の世界の情報に接し、その様相がわかってくるにつれて、自分の属する国や、その属する地域のありようとその特徴が、世界との比較のなかでおのずから浮き彫りになってきた。その結果が、いくつかの要素で共通する地域、すなわち、東アジアの発見だった、と言うことができる。

もっとも、如見の時代には、日本人は、まだ、アジア、あるいは、亜細亜（あさいあ）という地域概念に慣れはじめたところだ。「東アジア」という言葉の出現する時期とその意味などについては、次の検討課題とせざるをえない。しかし、その発想の仕方や内容の点で、後に「東アジア」と呼ばれることになる地域概念が、如見にまで遡るということは明らかになった。さらに、ヨーロッパ的な世界地理認識が定着しはじめた一八世紀はじめという時代性と、そのなかで彼の著書『増補華夷通商考』の果たした役割を考え合わせた時に、「東アジアの発見」という評価は、あながち的外れではないと言ってよいのではないだろうか。

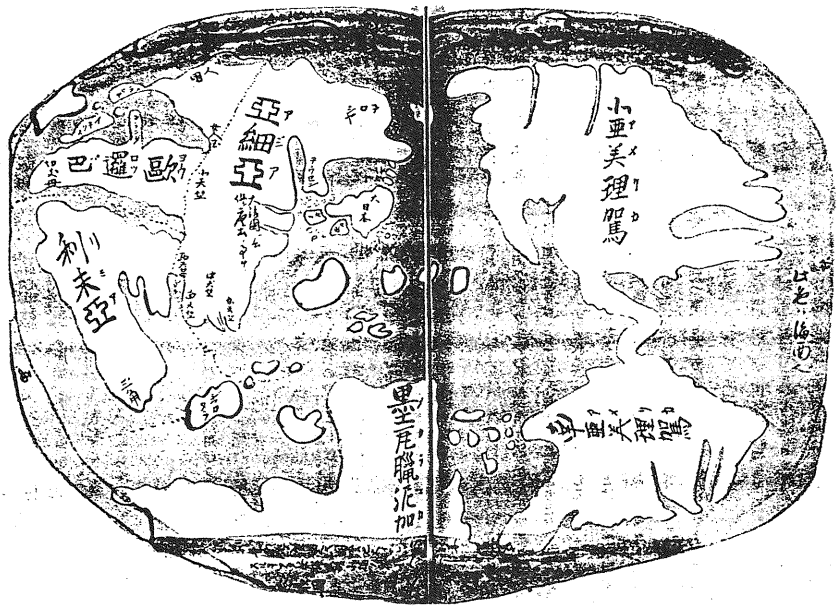
Ⅳ　おわりに

以上の検討結果をあらためてまとめることはせず、地図の歴史の表舞台から退いていった伝統的な絵図たちの後日談に簡単に触れて、やや冗長になったこのノートをしめくくることにしたい。

もっともプリミティヴな、日本列島を中心にして、蛇か、あるいは竜のようなものが取り巻いていた絵図は、近世においても、通俗的な世界図の一種、例えば鯰絵や、伊勢暦の表紙などになって、生き続けている。

二つめの、中国を中心とした世界図は、近世においても、依然として新しいものが描かれつづけていた。近世の日本は、文化や風俗の面から見れば、中国趣味や中国ブームが続いていたと言ってよい。オランダとの関係で脚光を浴びがちな長崎ですら、支配的な文化は中国風であり、オランダ的なものは、そのなかのわずかな部分にすぎなかった。それは長崎に滞在する中国人とオランダ人の人数を比べても明らかだ。おそらく、中国人は、つねに、すくなくとも、オランダ人の一〇倍かそれ以上の人数が滞在していた。

三つめの、三国観を表わす地図の変遷については本文中に縷説したが、南瞻部州図が、世界図としての役割を終えた後も、玄奘三蔵の旅を追慕する、いわば紙上の聖地巡礼



図Ⅷ　菅野八郎『あめの夜の夢咄し』所載世界図

のための需要は依然として強かったらしく、近世を通じて描かれ続けた。それはまた、聖地巡礼のすごろくなどの、通俗化した形で、庶民の生活のなかに生き続けた。それは、埋火のように、近代以後、日本人が自由に海外に出かけられるようになった時に再燃する仏教の聖地インドへの巡礼熱を準備することになる。

四つめの、一五世紀のはじめに朝鮮で作成されて、当時の東アジアの地図作成センターとしての朝鮮の力量を十分に示した地図たちの子孫のその後は、残念ながら、よくわからない。

そして、リッチ系や南蛮系の地図たちは、幕末になると庶民のすぐ傍までやって来ており、例えば、幕末に陸奥信夫・伊達両郡で起きた世直し一揆の指導者として知られる菅野八郎（一八一〇～八八）は、著書『あめの夜の夢咄し』で、自らの思想の正当性を世界情勢にもとづいて説きおこし、そのために世界図を描き添えている（図Ⅷ）。八郎に素材を提供した地図たちの祖先が来日してから二世紀半あまり経っていた。ずいぶん長くかかったようにも思える。しかし、その緩慢とも思える浸透の背景には、庶民の海外に対する根強い関心とその拡大があった。その欲求に答えたのが、これらの、やや現実離れしているかもしれないが、多様でそれぞれに懐かしい世界図たちだった。蘭学系の地

図は、確かに、当時の最先端だったが、一般の日本人、つまり、庶民にはほとんど縁がなかった。庶民の傍にあって、彼らの世界への関心を耕し続けたのは、庶民の傍らで息づいていたこれらの世界図だった。これらの世界図は、近代以後の地理教育のもとで、どのような運命をたどるのか、それは今後の課題としよう。

注

（1）『講座世界史Ⅰ　世界史とは何か』（歴史学研究会編、東京大学出版会、一九九四年）所収。

（2）荒野泰典「日本型華夷秩序の形成」『日本の社会史Ⅰ　列島内外の交通と国家』（岩波書店、一九八七年）所収。なお、その後の「倭寇的状況」論の展開については、筆者の村井章介氏との対談「前近代の対外関係史研究をめぐって」（『歴史評論』四八〇号、一九九〇年）と、後に、この対談が『新しい中世史像の展開』（歴史協議会編、山川出版社、一九九四年）に収録される際に付された関周一氏の補説を参照されたい。

（3）藤原惺窩の日記「南航日記残簡」（一五九六年）の本文は、佐々木綱洋氏による史料紹介「藤原惺窩伝補遺　南航日記残簡」に拠った。これは、二〇〇〇年三月に内之浦の調査に赴く際に、親友鹿児島大学教授原口泉氏から参考資料として貸与されたもので、筆者はその時はじめてこの日記の全文を知り、その内容に強く惹かれた。あらためて原口氏の示教に深く感謝する。

（4）阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東京大学出版会、一九六五年。金谷治「藤原惺窩の儒学思想」『日本思想大系二八　藤原惺窩・林羅山』（岩波書店、一九七五年）所収。なお、姜沆の『看羊録 ― 朝鮮儒者の日本抑留記 ―』（朴鐘鳴訳注、平凡社東洋文庫四四〇）参照のこと。

（5）この原文は以下のとおり。
天地之至大而此国之狹隘、豈不游者益広覧之智哉、吁

（6）この「世界図」は、よく知られている大型で装飾性の強い南蛮屏風系の世界図ではなく、航海用に使用されたポルトラノ系の世界図か、もしくは、四国土佐の浦戸に漂着したイスパニア船サン・フェリペ号の船員が描いたとの推測もある「浦戸湾漂着スペイン船航海図」のようなものだったのではないだろうか。なお、「世界図」に関しては、織田武雄他編『日本古地図大成　世界図編』（講談社、一九七五年）を参照のこと。

（7）『人国記・新人国記』（岩波文庫）の「解説」による。

（8）岸野久『西欧人の日本発見』吉川弘文館、一九八九年。

（9）この点については、とりあえず、荒野前掲注2論文参照。なお、「日本人」も形成に関する議論は、かねてから私のなかにわだかまっていたものが、同僚の野田嶺志氏（日本古代史）と議論をすることで、明確に意識化されたものである。私の問いかけに答え、議論につきあってくださった野田氏に感謝する。

（10）田中健夫「不知火海の渡唐船 ― 戦国期相良氏の海外交渉と倭寇 ―」『日本歴史』五一二号、一九九一年、後『東アジア通交圏と国際認識』（吉川弘文館、一九九七年）に再録。

（11）六角井戸は中国式の井戸とされており、それが存在することとは、かつてその地に華人が居住していた可能性を示すと考

えられる。なお、筆者は道路地図と交通標識によって確認するのみで、直接見てはいないが、橘湾に面した島原半島の小浜町富津にも「六角井戸」がある。これは観光用のパンフレットなどでは「弘法大師」の関連とされているようだが、華人関係のものではないだろうか。

(12) 村井章介『海から見た戦国日本』ちくま新書一二七、一九九七年。

(13) 内藤雋輔『文禄慶長の役における被虜人の研究』東京大学出版会、一九七六年。

(14) 応地利明『絵地図の世界像』岩波新書、一九九六年。なお、自己を中心に「世界」を描くのは、古今東西を通じて、すべての民族に見られるのではないか。いわゆるエスノセントリズムにもとづいて描かれたものだからだ。本文中にも触れたように、日本のみではなく、朝鮮にも、朝鮮半島を中心にし、日本や琉球などはその周辺の海中に小さく描かれているものをはじめ、いくつかの類型がある。次に触れる、中国を中心とした世界図も、中国人のエスノセントリズム、すなわち、中華意識にもとづいて描かれたものという点では共通しており、この類型に入る。これに関して興味深いのは、一六八〇年に九州の日向に漂着したパタン人(台湾の南方にある小さな島の住人といわれている)の地理感覚にもとづいて描かれた図だ。よく知られているのは、彼らの情報にもとに、日本人によって描かれた、ポルトラノ式の「波丹人絵巻所載東亜航海図」だ。この地図が、宮古島を「ポロ」、沖縄本島を「イロコ」と表記しているのは、彼らの呼び方をそのまま採用したからだと考えられている。それに関連にして、同じ記録に収録されている、彼らの地理感覚をそのまま地図にしたものが、注目される。その図は、彼らの島を中心に彼らの生活圏が描かれており、「ポロ」、「イロコ」もそのなかにあるが、日本の九州らしきものが図の上の方に描かれている。この地図は、彼らが独自の地理認識をもっていたことを雄弁に物語っている。

(15) 織田武雄『地図の歴史』講談社、一九七三年。

(16) ここに掲げた図は、前掲注6書の「解説編」の説明図である。この説明図は、同書の編者によって、日本最古の法隆寺蔵「五天竺図」(一三六四年)をもとに、地名等の表記を一部現代風に改めて作成されたものである。原図が、あまりにも詳細・複雑、かつ難解なので、この説明図を借用して掲げた。

(17) 「天竺」は、現代の私たちが考える「インド」ではない。現在の東南アジアから南アジアを含む、広い地域が天竺だ。近世以後日本人の地理認識がより現実的になっていくに従って、天竺は現在のインドに集約されていくのだ。なお、荒野泰典「天竺」の行方 ― 三国世界観の解体と天竺 ―」(『中世史講座11』学生社、一九九六年)を参照のこと。

(18) すでに地図史の研究史では明らかにされていることだが、興味深い史実なので、あえて紹介しておく。五天竺図に日本島を描きこむという日本人の工夫には、実は、先例があったのではないかと考えられている。というのは、高麗時代の儒官尹誧(一〇六三〜一一五四年)が五天竺図を作成したという記録があり、その系統をひくのではないかと推測されている五天竺図が、『拾介抄』のある種の写本に収載されている(天理図書館蔵天文一七年書写本)。この図では、日本の位置に「高麗」があり(日本は描かれていない)、「唐土」の北方に「契丹」や「胡国」が描かれているなど、もともとは高麗

で描かれたものが、日本に伝来したものだろう。この図の「高麗」に代えて「日本」を描きこめば、日本型の五天竺図の枠組みができあがることになる。あるいは、五天竺図の日本への伝来の経路も、高麗経由だったのかもしれない。なお、この点については、室賀信夫・海野一隆「日本に行われた仏教系世界図について」（『地理学研究』一集、一九五七年）、および、海野一隆『地図の文化史 ― 世界と日本 ―』（八坂書房、一九九六年）を参照のこと。

(19) 鮎沢信太郎「マテオ・リッチの世界図に関する史的研究 ― 近世日本における世界地理知識の主流 ―」（『横浜市立大学紀要No. 18』、一九五三年）。なお、『籌海図編』の編者が、胡宗憲ではなく、鄭若曾であることについては、田中健夫「籌海図編の成立」（『日本歴史 五七号』一九五三年、のち、同著『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会、一九五九年、に再録）を参照のこと。

(20) ちなみに、リッチの地図では東アジアは中央に来ており、これは中国人の中華意識に配慮したためだと言われている。日本においても、地図が日本化するにしたがって、日本列島が地図の中心に位置するようになるという傾向が見てとれる。

(21) 織田武雄前掲注12書。なお、南蛮系世界図の系統については、海野一隆「南蛮系世界図の系統分類」（有坂隆道他編『論集日本の洋学I』清文堂、一九九三年、所収）参照。海野氏の検討によれば、いわゆる南蛮系世界図の原図は、いずれも、ポルトガル・イスパニアではなく、オランダで活動していた地図製作者の手によって、アムステルダムやアントワープで刊行されたものだった。したがって、これらの世界図は、厳密に言えば、南蛮系ではなく、紅毛系ということになる。

(22) これら二つの海図に関する以下の説明は、『日本古地図大成世界図編』（前掲注6）の「解説」による。なお、「ポルトラノPortolano型」海図の説明は、織田武雄前掲注12書によれば、以下の通り。航海にコンパスが使用されるようになるにともなってヨーロッパで生まれた海図で、一三世紀頃の起源と推定されている。もともとは、中世後期に作られた航海案内書のことを指し、その起源は、ギリシア時代の、航海に関する知識を記載した航海案内書（ペリプルスPeriplus）に遡るという。しかし、現在ではポルトラノは、このタイプの海図を指すようになっている。その特徴は、「地図上に描かれた多くの方位盤から放射状に放出する三二本の方位線が複雑に交錯し、網状に張りめぐらされている」ことで、これらの方位線を基準にして、航海者が一つの港から他の港に向かうのに必要な航路の方角を容易に知ることができた。日本に来航したヨーロッパ人たちが使用したが、朱印船時代には、朱印船も按針（パイロット）役にポルトガル人やオランダ人などのヨーロッパ人を雇ったので、彼らによってヨーロッパの航海術やポルトラノ型の海図も伝えられた。しかし、このタイプの地図は、日本人の海外渡航が禁止されて後は多く破棄されたらしく、現在存在が知られているのは二〇点ほどである。

(23) ヨーロッパ人の渡来の初期に、彼らによって描かれた日本図には、およそ五つの類型があった。ドゥラード型はそのうちの一つで、フェルナン・ヴァス・ドゥラード（Fernao Vas Dourado）によって描かれた日本図（一五七三年）の特徴を持つものをいう。これについても、織田武雄氏の著書（前掲注12）を参照。

(24) 織田武雄、前掲注12書。
(25) 近世の日本で作製されたヨーロッパ系世界図の三類型については、前掲注6『日本古地図大成』等に従っているが、直接には海野一隆前掲注18論文、および同「正保刊『万国総図』の成立と流布」(有坂有道編『日本洋学史の研究X』創元社、一九九一年、所収)によっている。
(26) 海野一隆、前掲注22論文。この世界図が変わっているのは、対となる民族図譜に記載されている民族(国)名を世界図中の地名とした白地図とし刊行されていることだ。さらに地名を補充することがあらかじめ予定されており、そうすることによってはじめて地図として実用に耐えるものになった。実際、そのようにして完成されたものも現存する。これらのことから海野氏は、謙貞が、弟子に対して、測量術・航海術などを習得した証明として、民族図譜と対で与えるために刊行したもの、と推定している。蛇足ながら、私はこの民族図譜を前著『近世日本と東アジア』(東京大学出版会、一九八八年)のカヴァーの図柄に利用したが、今更ながらそのことに奇妙な因縁を感じている。
(27) 節用集は、室町時代中期、文明年間(一四六九〜八七年)以前に成立した、いろは引きの通俗的な国語辞書。きわめて多く用いられ、各種の写本・版本を生み、明治・大正期にまでおよんだ(小学館『日本国語大辞典』)。
(28) 『天球二球用法』は、アムステルダムの地図家で、天球儀・地球儀の製作・出版でも有名だったブラウWillem Jansz.Blaeu(一五七一〜一六三八)が、一六三三年に製作した天球儀・地球儀に関する手引書として著述したものが原典。これのラテン語訳をさらにオランダ語に訳したものの一六六六年版が長崎に輸入され、それを良永が翻訳して本書が成立した(『洋学史事典』(日蘭学会編、雄松堂出版、一九八四年)の広瀬秀雄氏の記述による)。なお、この書でブラウは、プトレマイオスの天動説とコペルニクスの地動説を公平に紹介しており、両説のうちどちらかに加担するというような態度をとってはいない。
(29) 同書巻五五地部。引用は、平凡社東洋文庫版の島田勇雄氏他の翻訳によった。
(30) この点については、荒野泰典「近世の対外観」(『岩波講座日本通史 第十三巻』一九九四年)参照。
(31) 前掲注6書「解説」による。
(32) 室賀・海野注15論文。なお、この前後の記述は、同論文に多くを負っている。
(33) 前掲注6書「解説」による。
(34) 前掲注27論文、および注1論文。
(35) 西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会、一九八三年。

【付記】本稿は、二〇〇〇年七月八日に早稲田大学小野講堂で開かれた日本歴史学協会創立五〇周年記念シンポジウム「世界史における東アジア 一六〜一九世紀」において、「日本史の立場から」と題して行った私の報告に、大幅に加筆訂正をしたものである。論旨は変えていないが、当日の報告よりも、より私自身のイメージに近いものになったと感じている。『史苑』への掲載を快諾され、このテーマについてより深く考える機会を与えていただいた立教大学史学会委員会にあつく感謝する。

(本学教授)